

## 終末期看護に対する看護教員の思い・考えから導く教育的示唆

齋藤晃代

### Educational suggestions for terminal care based on learning the thoughts of nursing teachers

Teruyo SAITO

#### 要旨：

目的：終末期看護に対する看護教員の思い・考えを臨床の場で表現することが教育につながるといわれているが、思い・考えそのものがどのようなものであるかは明らかにされていない。そこで各専門領域を担当している教員の終末期看護における思い・考えを明らかにし、教育的示唆を得ることを目的とした。

研究方法：質的記述的研究デザインとして、東北地方の専門学校の看護教員8名を研究対象者とし半構造化面接を実施した。分析方法はグラウンデッド・セオリー・アプローチで行った。

結果：以下の《》はカテゴリを示す。

終末期看護に対する看護教員の思い・考えは、《死が近づく患者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ》があり、《臨床経験を教育に反映できる自信》《終末期患者の後悔ないよう導く癒しの援助》《家族の希望を尊重し学生と一緒にいったケア》《患者の死別後の家族・医療者からの温もりある言葉のありがたさ》から、《学生が一生懸命援助した場面に動かされた心》《学生と一緒にケアすることで得られる達成感》となっていた。

考察：看護学生が終末期患者と家族との関わりで、達成感が得られた喜びそのものが、看護教員の達成感であり、辛さを軽減させるものである。看護教員は、看護学生の辛さをサポートしながら、学生が生と死について関心をもてるように関わり、終末期患者と家族の思いを考えさせていくことが必要である。

キーワード：終末期看護、看護教員、思い、考え

#### Abstract：

Objective：It is said that learning the thoughts of nursing teachers in terminal care will improve education. However, it is not clear what those thoughts are. Therefore, the aim was to clarify the thoughts of the nursing teachers in terminal care who are in charge of their respective specialized fields and obtain their educational suggestions for terminal care.

Research Method：Following qualitative descriptive research design, a semi-structured interview was conducted with eight nursing teachers from vocational schools in the Tohoku area as research subjects. Analysis was done following Grounded Theory approach.

Results：The feedback of the nursing teachers for end-of-life care is as follows:《Dealing with the emotional pain both students and teachers suffer when caring for terminal patients.》《Confidence that clinical experiences can be reflected in education.》《Helping students to assist terminal patients to have no regrets.》《Ensure that students respect the family's wishes.》《Value of the warm words from both the patient and their family after the patients death.》《Feeling moved by seeing the students' hard work.》《The sense of accomplishment gained through working with students to care for patients.》

Consideration：Nursing teachers need to support the students through the emotional pain of caring for terminal patients so students are more able to understand the importance of terminal care.

Key Words：terminal care, nursing teacher, thoughts

---

由利本荘医師会立由利本荘看護学校

Yuri Honjo Medical Association Yurihonjo Nursing School

## I. 序文

人口動態統計（厚生労働省）によると、2012年には、病院で死を迎える人が76.3%となっている（小松，2014）。医療の進歩により、終末期にある人は、最新の治療が行われる場で人生最期のときを過ごしていると考えられる。このような背景の中、看護教育で、患者が心身ともに平和で穏やかな死を迎えられる看護援助ができる能力を育成する必要があり、カリキュラムにおける終末期看護に関する講義・実習は重要である（上田ら，2012）。

身近な人の死に直面したことのない看護学生にとって、臨地実習で終末期の患者を受け持った時に、戸惑いや不安を抱き、コミュニケーションさえできなくなることがある。さらに、看護実習では生命の危機状態にある重症患者は状態が変化しやすく予測が困難なことから、看護教員が受け持たせることを極力避ける傾向にある（小澤ら，2011）。このように、死について深慮する機会がないと患者に合ったケアを考えることができないだけでなく、自身の感情コントロールも困難となることが考えられる。

終末期にある患者とその家族のニーズに応える看護を行うためには、患者の死への恐怖や苦しみを深慮していくケアが必要であると考えられる。しかし、このようなターミナルケアに関わる上でのスキルはすぐに身に付くものではない（狩谷，渡會，2011）。そのため、看護学生の頃より終末期看護における看護観をもつことが重要であると考えられる。終末期看護で培われる看護観は、看護師一人ひとりの人生観・死生観が影響し、ケアの考え方も関わる看護師により多様である（青木，尾原，2008）。終末期看護に対する看護教員の思い・考えが臨床の場で表現することが教育につながるといわれている（風間，伊藤，2008）。しかし、終末期看護に対する看護教員の思い・考えそのものがどのようなものであるかは明らかにされていない。さらに終末期看護は、各専門領域においても必要不可欠である（清水，2015）。そこで、各専門領域を担当しているそれぞれの教員が、終末期看護において大切にしている思い・考えがどのような構造とプロセスになっているかを明らかにし、そこから教育的示唆を得ることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 研究方法と内容

- 1) 研究デザイン：質的記述的研究
- 2) 対象者

(1) 研究対象者：東北地方の看護専門学校の

教員10人

設定根拠：大学・短期大学・専門学校では教育課程が異なる。筆者と同じ専門学校の教員を対象とすることで同じ教育課程で教えている看護教員の終末期看護における思い・考えを調査できるため。

#### (2) 選択基準

- ①看護教育歴1年以上の教員
- ②臨床経験5年以上の教員
- ③臨地実習指導に携わったことのある教員
- ④本研究への自由意思のもと研究参加を了承し同意の得られた教員

#### (3) 除外基準

死別体験を語ることにより、明らかに精神的な混乱を招くと研究者が判断した教員

### 2. 研究期間：平成28年6月～平成30年3月

データ収集期間：平成28年7月～8月

### 3. 用語の操作的定義

- 1) 看護教員：看護専門学校で教育に携わっている教員
- 2) 思い：看護教員が臨床経験や教育経験、死別体験を通して抱いている感情
- 3) 考え：看護教員が臨床経験や教育経験など人生経験により培われてきた終末期看護に対する思考

### 4. データ収集方法：インタビューガイドを作成し、半構成的面接法でのデータ収集を行った。

#### 調査内容

- 1) 属性調査
  - 年齢、教育経験、臨床経験を履歴に記入してもらった。
- 2) インタビューガイドの内容
  - (1) 看護師になった理由（終末期看護との関連）
  - (2) 身近な人との死別体験
  - (3) 終末期看護において臨床・教育経験で印象に残った事例
  - (4) 終末期看護に対する思い・考えの変化
  - (5) 教育への反映状況
- 3) インタビュー
  - (1) 時間は1人60分以内とし、対象者の勤務時間外で行った。
  - (2) インタビューガイドに沿って半構成的にインタビューを行った。

## 5. 分析方法：グラウンデッド・セオリー・アプローチ（才木，2014）

理由：看護教員の終末期看護における思いや考えが、どのような構造になっているか。また、人生経験を経ることによりどのようなプロセスになっているのかを把握し結果を得るため、アキシャル・コーディングでカテゴリ同士の関連づけができるグラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。

### 分析の手順

- (1) 録音されたインタビューの内容から、逐語録を作成した。
- (2) データを十分に読み込み、データの切片化を行った。
- (3) 分析：オープン・コーディング、アキシャル・コーディングを行った。オープン・コーディングでは、8人の対象者であるA～Hの個人分析を行った。まず逐語録として記述した内容を繰り返し読み、データの切片化を行いサブカテゴリ化した。意味内容の似ているサブカテゴリを同じグループに分類しカテゴリ化した。終末期看護における患者・家族の状況や思い、対象者の臨床経験、看護教員としての思い・考えを示すカテゴリ名をつけた。  
アキシャル・コーディングでは、オープン・コーディングで抽出されたカテゴリがサブカテゴリとなり、さらに対象者A～Hの意味内容の似ているサブカテゴリを同じグループに分類した。このカテゴリから、状況と行為／相互行為と帰結の3つで構成されているパラダイム（現象）の生成を行い、全体を表すカテゴリを選び、現象を表す中心カテゴリとした。そのとき、プロパティとディメンションを参考に関連図を用いてカテゴリ同士の結びつけを行った。
- (4) データ同士の比較：データに出ている状況を比較するため、データ内の比較を行った。プロパティ、ディメンションという視点において、両者がどのようになっているかを比較した。
- (5) 本研究は研究者の限られた研究期間の中での分析であるため、理論的サンプリングは行わなかった。
- (6) 分析結果は、質的研究の指導者からスーパーバイズを受け、分析結果の信憑性を確保した。

## 6. 倫理的配慮

- 1) 研究者が、研究対象者全員に集ってもらい、研究協力をお願いの文書を用いて研究の重要性・目的・意義について、口頭で説明を行った。研究対象者に、強制的ではないことを強調し、自由意思に基づく同意であること、同意撤回も可能であることを説明した。
- 2) 同意が得られた研究対象者へ最初の面接の際に同意撤回書を作成し渡した。
- 3) 面接の行う日時について研究対象者の仕事に支障のない、希望する時間帯で面接日時を調整して決定することを説明した。
- 4) インタビューはプライバシーに配慮するため、また時間的拘束の不利益を最小限にするため、勤務先の面談室で行った。
- 5) 個人が特定されないよう研究の最初から氏名について連結可能匿名化で対応した。データの取り扱いはデータファイルにパスワードをとりつけた。
- 6) 日本赤十字秋田看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号28-101）。

## Ⅲ. 結果

### 1. 研究対象者ならびに面接の概要

#### 1) 対象者の概要

東北地方の専門学校の看護教員10人の予定であったが、そのうち同意の得られた8人に面接を行った。男性2人、女性6人、平均年齢は52歳（38～62歳）だった。

対象者の平均臨床経験年数は、17年（9～30年）だった。臨床経験では、全ての対象者が病棟勤務を経験しており、その中で、手術室勤務経験者が2人、ICU勤務経験者が1人、外来勤務経験者が1人だった。臨床経験はあるが病棟経験がない対象者は1人だった。

平均教育経験は、約8年（1～23年）だった（表1）。

現在の所属領域は、3人が成人看護学、1人が老年看護学、2人が小児看護学、1人が精神看護学、1人が在宅看護論だった。

#### 2) 面接の概要

8人の研究協力者の中には、身内の死や臨床経験の中で患者の思いに寄り添えなかった後悔を思い出し、涙を流す場面が2人にみられたが、面接途中で体調不良を訴えることはなかった。

1人あたりの平均面接時間は54分（45～100分）だった。

表1 対象者の属性

対象者	A	B	C	D	E	F	G	H
年齢	40歳代	30歳代	60歳代	50歳代	50歳代	50歳代	40歳代	50歳代
教育経験	4年	1年	9年	2年	23年	6年	8年	8年

表2 カテゴリの定義

カテゴリ	定義
《死が近づく患者に感情移入することによる学生・教員の辛さ》	死が近づく患者の辛さに学生・教員が感情移入してしまい辛くなること
《臨床経験を教育に反映できる自信》	医療の状況が変化しても、看護師としての臨床経験があるため、教育に反映させる自信があること
《終末期患者の後悔ないように導く癒しの援助》	学生が終末期患者を受け持ったとき、看護教員は学生とともに後悔のないように患者に癒しの援助を行ったこと
《家族の希望を尊重し学生と一緒にいったケア》	看護教員は、終末期の患者のケアを家族の希望を尊重しながら、学生と一緒にケアを行ったこと
《患者の死別後の家族・医療者からの温もりある言葉のありがたさ》	患者の死別後に家族や医師などの医療者から、感謝の言葉をうけありがたいと感じたこと
《学生が一生懸命援助した場面に動かされた心》	看護教員は学生が一生懸命終末期患者のケアを行った場面をみて、心が動かされたこと
《学生と一緒にケアすることで得られる達成感》	看護教員は学生と一緒に終末期患者のケアを行うことで、学生も指導している教員も達成感が得られること

2. 分析結果

以下に文章中の【】は現象となるカテゴリ、《》はカテゴリ、“”はプロパティ、「」はコード、斜め字は対象者の語りを示す。

1) 分析結果としての研究対象者の背景

研究対象者の看護師になったきっかけとして、「爽やかな素敵で看護士の姿をみて芽生えた看護士になりたい思い」「看護士の身内の姿をみて芽生えた看護士になりたい思い」「身内の病気の経験から、人の役に立ちたい思い」「身内が入院中の看護士の対応に憤りを覚えたことがきっかけ」という内的動機づけから看護士を選んでいった。また、他の職業に就きたかったが、結果として看護士を選んでいった対象者もいた。

2) 思い・考えの構造とプロセス

看護教員の終末期看護に対する思いは、現象のなかの状況に集まっており、それに対応するものが考えとなり行為／相互行為でみられていた。

終末期看護に対する思い・考えの現象について述べる。

(1) 現象となるカテゴリの【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】の生成結果この現象は、状況として《死が近づく患

者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ》、行為／相互行為として《臨床経験を教育に反映できる自信》《終末期患者の後悔ないように導く癒しの援助》《家族の希望を尊重し学生と一緒にいったケア》《患者の死別後の家族・医療者からの温もりある言葉のありがたさ》、帰結として《学生が一生懸命援助した場面に動かされた心》《学生と一緒にケアすることで得られる達成感》の7個のサブカテゴリで構成され、カテゴリの定義づけを行った(表2)。

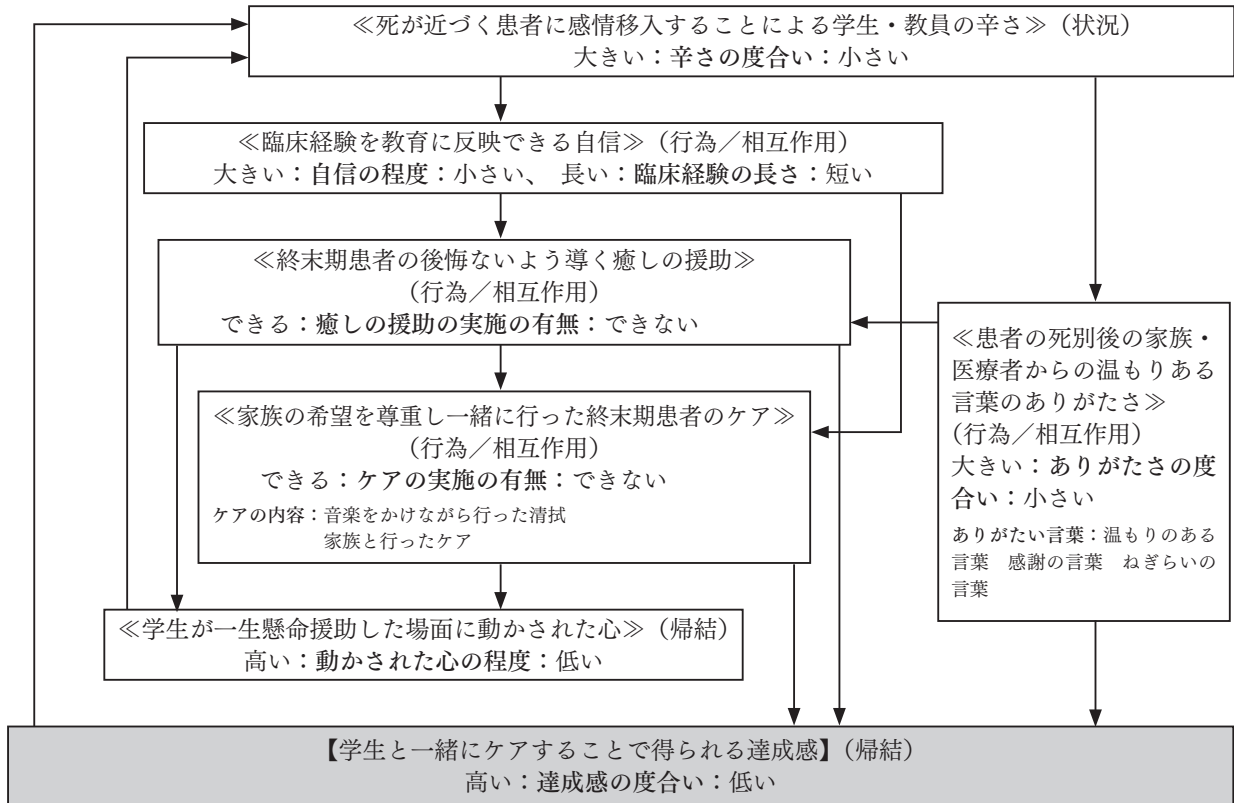
以下に、終末期看護に対する思い・考えが、スタート時点の状況と帰結として生じた新たな状況との間で起きた変化やプロセスについて説明する。

(2) Cさんの語りの内容

呼吸器の終末期病棟では患者は息苦しくなるためにその辛さに感情移入することで、(教員も学生も)辛くなる。

学生は終末期患者の看護が怖くて手がだせない状況にある。だけど教員と一緒にケアすることで、学生と一緒に教員も達成感を抱く。

Cさんは呼吸器疾患のある終末期患者を学生が受け持ったとき、日を追うごとに呼



- ・太字はプロパティ、細字はディメンションを示す。
- ・実線はディメンションにより進んでいく過程を示し、促進関係を示す。

図1 【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】 関連図

吸状態が悪化していく患者を見て、《死が近づく患者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ》を抱いていた。Cさんは学生が感じている辛さを目の当たりにし、さらに辛さを感じていた。しかし、Cさんは学生が終末期患者へケアする不安が軽減されるように【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】につながったと考えていた。

(3) 【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】の現象に関わる関連図 (図1) およびストーリーライン

プロパティとディメンションを参考に関連図を用いてカテゴリ同士の結びつけを行った。以下、【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】の現象の説明をする。

《死が近づく患者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ》の“度合い”が大きいとき、臨床経験が長いとき《臨床経験を教育に反映できる自信》の“程度”が大きくなっていった。それにより《終末期患

者の後悔ないように導く癒しの援助》を“実施”することができ、音楽をかけながら清拭を行い《家族の希望を尊重し一緒に行った終末期患者のケア》を“実施”することができていた。これらのケアにより《学生が一生懸命援助した場面に動かされた心》の“程度”が高くなり、《死が近づく患者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ》の“度合い”が小さくなっていった。

また、《死が近づく患者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ》の“度合い”が小さいときも、患者の死別後に家族や医療者からの感謝やねぎらいのある《温もりある言葉のありがたさ》の“度合い”が大きくなり、このことが《終末期患者の後悔ないように導く癒しの援助》を“実施”することにつながっていた。これにより【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】の“度合い”が高くなっていった。この達成感の“度合い”の高さが、《死が近づく患者の辛さに感情移入することによる学

生・教員の辛さ」の“度合い”を小さくしている。また、「終末期患者の後悔ないように導く癒しの援助」を“実施”することで、「学生が一生懸命援助した場面に動かされた心」の“程度”が高くなり【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】の“度合い”が高くなっていった。さらに、「家族の希望を尊重し一緒に行った終末期患者のケア」を“実施”することでも【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】につながっていた。

一方、「患者の死別後の家族・医療者からの温もりある言葉のありがたさ」の“程度”が低いときも【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】の“度合い”を高めていた。

しかし、「死が近づく患者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ」の“度合い”が大きいとき、「臨床経験を教育に反映できる自信」の“程度”が小さいとき、「家族の希望を尊重し一緒に行った終末期患者のケア」を“実施”することができない。

以上のことから【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】が見いだされた。

#### IV. 考 察

先行研究では、看護教員の思い・考えを明らかにする必要があると問われていたが（風間, 伊藤, 2008）、これまで明らかにされていなかった。本研究の対象者は、専門学校教員に限定されているが、今まで未知であった看護教員の終末期看護における思い・考えを明らかにしたことは意義があると考えられる。

看護教員の終末期看護における思い・考えで得られた【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】へとつながる思い・考えを考察し、その教育的示唆について述べる。

##### 1. 【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】につながる思い・考えの考察

本研究の結果から、「死が近づく患者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ」は、【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】という変化を生じさせていることがわかった。

【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】が得られるために必要だと考えたことは、看護教員が学生と共に「終末期患者の後悔ないように導く癒しの援助」を行っていることである。先行研究では、死に対しての体験の少なさは、不必要な恐

れや、逆に認識のなさをも生み出しているとされている（久保川ら, 2010）。身近な人の死に直面したことの無い看護学生は、終末期患者を受け持った時に、戸惑いや不安を抱いている。そのため看護教員が看護師としての経験をもとに、学生を支援しながら学生と共に看護を考えていくことが必要であると考えられる。教育とは、学習者と教授者との「共育」であり、学生の臨床の場での経験は、患者との関係にとどまらず、教員とのかわりにおいても積み上げられている（梅川, 2014）。すなわち、看護教員と学生は、共に学び共に考えながら、お互いに影響し合うことが「終末期患者の後悔ないように導く癒しの援助」につながり、達成感につながるのだといえる。

さらに看護教員は、学生とともに終末期の患者の耐え難い疼痛や不安が伝わることによる「死が近づく患者に感情移入する学生・教員の辛さ」に対して、感情労働をしていた。アメリカの社会学者のアーリー・ホックシールド（2000）は感情労働を公的に観察可能な表情と身体表現をつくるために行う感情管理という意味で用いるとしている。相手の表情や身体から表現されることを知覚して自分の感情を管理して対人関係を図るものである。武井（2001）は自分の感じている怒りや苛立ちを表情にださないように我慢しなければならないとき、つらく落ち込んでいるときに明るく患者に接しなければならないとき、看護が感情労働であると思うと述べている。伊佐（2009）は、教師も感情労働をしているとしている。このような様々な感情を体験しているが、それを外に表すことを不適切としている感情規則があるため、強い感情が湧くたび、その感情を自分で管理しようとする感情作業をしている（武井, 2001）。患者を看護する看護師だけが感情作業をしているのではなく、終末期の患者に携わる看護教員も、患者に感情移入してしまうことによる感情作業しているのである。

また、学生も死が近づく患者に感情移入し辛さを感じている。看護教員は、その学生が感じている辛さを目の当たりにし、さらに辛さを感じている。看護教員自身が看護学生の辛さに共感疲労しているのである。共感疲労は、医療者の感情的な疲弊と呼ばれる一連の体験である。これは、医療者が被害にあってなくとも、被災した人の傍にいたり、悲惨な話を聴くことにより、恐怖とともに深刻な罪悪感や無力感を体験するケアの代償である（小宮ら, 2015）。このような感情労働は、職業性ストレスの要因と同様に、様々な心理的陰性ストレス反応に影響を及ぼしてい

る(片山, 2010)。それゆえに、看護教員は、患者や学生に感情移入してしまう辛さをコントロールしていく必要がある。コントロールにはSense of Coherence (以下SOC) が有効である。医療社会学者であるアントノフスキーはSOCという首尾一貫感覚という概念を提唱している。SOCは、有意味感、把握可能感、処理可能感の3つの要素から構成される。SOCが高い人は、ストレスの大きなものに遭遇しても、心の健康を害さず過ごすことができるとしている(小松, 2014)。対処としてSOCを活用することで辛さをコントロールしていくことができると考える。すなわち、看護教員は終末期患者や学生の辛さに感情移入してしまうことの中にも意味を見いだせるように関わり、その辛さは長きにわたり続くものではないと思えることが必要である。

さらにデーケン(1987)は、医療従事者や患者の家族などが死にゆく患者の望むような援助とケアを与えられない場合、その原因は知識や技術の欠如ではなく、情緒的な問題であると述べている。過剰な死への恐怖は、死が間近に迫っている患者と、死について語り合う際の障害となり、望まれる援助を正しい知識と技術で実践することの妨げとなる。「死の準備教育」の第3の感情のレベルを欠いた場合、終末期患者とのコミュニケーションに支障をきたすことになる。この3つのレベルを習得していない限り、第4のレベルに進むことはできない。すなわち、看護教員は、学生を指導するにあたり、終末期患者と家族のケアを行うという責任と自覚をもち、生と死の問題に対して自分自身の感情を認識し、コントロールしていく力を身につけなければならない。そのためには、ソーシャルサポートの活用が必要である(原田, 森山, 小林, 2012)。辛さに対する対処のうち、他の教員に相談することにより勇気づけられるなどが情緒的サポートであり、終末期領域を担当する教員同士が集まり、情報を共有しながら、辛さを解決していく機会を設けていくことが道具的サポートであると考えられる。看護教員は巧みにソーシャルサポートを活用して自身の辛さを軽減していく必要がある。

## 2. 教育的示唆

終末期患者は身体的状態が悪く、精神的に不安定な状態であるため、看護学生がケアを実践した後の効果を判断することは難しい。学生は直面する状況に対する経験が全くないため、患者の情報を情報としてとらえることができず、集めた情報を結びつけられない(Benner, 2005)。そのため、

看護学生が、自分自身の知識・技術の不足や未熟さを痛感しやすい。学生が終末期患者を受持った臨地実習を肯定的な意識でとらえるためには、受持ち患者の身体的・心理的特徴を理解して、自らが計画した援助を実践できたと看護学生自らが認識し、達成感を得ることが重要である(原田, 安森, 藤永, 田墨, 2013)。看護学生が終末期患者と家族との関わりで、達成感が得られた喜びそのものが、看護教員の達成感であり、辛さを軽減させるものであるといえる。看護教員は、自身の辛さをコントロールしながら、看護学生の辛さをサポートし、学生が生と死について関心をもてるように関わり、終末期にある患者と家族の一つひとつの思いを考えさせていくことが必要であると考えられる。

## 3. 研究の限界と今後の課題

本研究では限られた期間での研究であったため継続比較分析を行っておらず、次のインタビューに反映させることができなかった。

今後は理論的サンプリングにもとづくデータ収集と分析を繰り返す中で、分析は理論的飽和の段階を目指していくことを課題とする。

また、今後は、看護短期大学や看護大学教員を対象にしていくことでより、さらに異なった終末期看護に対する思い・考えやカテゴリがでてくる可能性があると考えられる。

## V. 結論

看護教員の終末期看護における思い・考えの構造とそのプロセスについて分析した結果は以下の通りであった。

1. 終末期看護に対する看護教員の思いは、現象のなかの状況に集まっており、それに対応するものが考えとなり行為/相互行為でみられていた。
2. 【学生と一緒にケアすることで得られる達成感】という現象は、状況として「死が近く患者の辛さに感情移入することによる学生・教員の辛さ」、行為/相互行為として「臨床経験を教育に反映できる自信」「終末期患者の後悔ないように導く癒しの援助」「家族の希望を尊重し学生と一緒に行ったケア」「患者の死別後の家族・医療者からの温もりある言葉のありがたさ」、帰結として「学生が一生懸命援助した場面に動かされた心」「学生と一緒にケアすることで得られる達成感」があった。
3. 看護学生が終末期患者と家族との関わりで、

達成感が得られた喜びそのものが、看護教員の達成感であり、辛さを軽減させるものである。

4. 看護教員は、看護学生の辛さをサポートしながら、学生が生と死について関心をもてるように関わり、終末期にある患者と家族の一つひとつの思いを考えさせていくことが必要である。

## 謝 辞

本研究に辛い体験を語りご協力くださいました研究協力者の皆さま、論文を執筆するにあたり、ご指導頂きました日本赤十字秋田看護大学 下平唯子先生、木庭淳子先生に深く感謝申し上げます。

本研究は日本赤十字秋田看護大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正したものである。

本研究は、日本赤十字秋田看護大学学長裁量費の助成を受け執筆した。本研究による利益相反はない。

## 引用文献

- 青木早苗, 尾原喜美子 (2008). ターミナル期のがん患者を受け持つ看護学生を指導する実習指導者のゆらぎ. 高知大学看護学会誌, 3-13.
- Benner, P. (1982). From novice to expert. American Journal of Nursing, Mar, 127-135.
- Benner, P., 井部俊子監訳 (2005). ベナー看護論 新訳版—初心者から達人へ, 医学書院, 1-269.
- Hochschild, A., 石川准, 室伏安希訳 (2000). 管理される心 感情が商品になるとき, 世界思想社, 126.
- Deeken, A. (1987). 死への準備教育 死を教える. メヂカルフレンド社, 2-366.
- 原田江梨子, 安森由美, 藤永新子, 田墨恵子 (2013). 終末期患者を受持った実習体験が看護学生の意識に及ぼす影響. 第43回日本看護学会論文集 成人看護II, 42-45.
- 原田浩二, 森山美知子, 小林敏夫 (2012). 看護教員の職業選択動機別によるソーシャルサポート, ストレス, バーンアウトとの関連について. 広島大学保健学ジャーナル, 10, 55-61.
- 伊佐夏実 (2009). 教師ストラテジーとしての感情労働. 教育社会学研究, 84, 125-145.
- 風間たま代, 伊藤ふみ子 (2008). 看護教育における看護学生の死生観に関する本邦過去35年間の研究の概観. 横浜創英大学紀要, 4, 1-11.
- 片山はるみ (2010). 感情労働としての看護労働が職業性ストレスに及ぼす影響. 日本衛生学雑誌,

524-529.

- 狩谷恭子, 渡曾丹和子 (2011). 看護大学生における死生観と死に対するイメージの学年比較. 医療保健学研究, 2, 107-116.
- 久保川真由美, 栗原加代, 山岸千恵, 小澤尚子, 原島利恵, 豊田真由美, ...宇留野由紀子 (2010). 終末期看護実習での学生のトータルペインの理解のプロセス—9名の学生のインタビューから—. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 2 (1), 11-18.
- 小松浩子 (2014). 成人看護学総論. 医学書院, 236-237.
- 小宮敬子, 武井麻子, 鷹野朋美, 堀井湖浪, 内藤なずな, 赤澤雪路, ...白柿綾 (2015). 災害救援と共感疲労—東日本大震災に救援に赴いた看護師の体験から—. 第16回日本赤十字看護学会学術集会 講演集, 65.
- 小澤尚子, 栗原加代, 堀田涼子, 久保川真由美, 前田和子, 原島利恵 (2014). 終末期看護実習を経験した学生のターミナルケア態度. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 3 (1), 11-20.
- 清水佐智子 (2015). 看護学生への緩和ケア教育の長期的な効果—終末期患者に対する態度の講義直後と3カ月後の比較. 日本緩和医療学会誌, 169-76.
- オ木クレグヒル滋子 (2014). グラウンデッド・セオリー・アプローチ分析ワークブック. 日本看護協会出版会, 3-148.
- 武井麻子 (2001). 感情と看護, 人とのかかわりを職業とすることの意味. ヌベール・ヒロカワ, 47.
- 上田稚代子, 上田伊津代, 畑野富美, 住田陽子, 山口昌子, 坂本由希子 (2012). 看護学生への緩和ケア病棟における実習での学び—死生観・看護観のレポートからの分析—. 関西大学紀要, 51-58.
- 梅川奈々 (2014). 看護系大学における職業教育のあり方—経験をとおした省察への支援—. 千里金欄大学紀要, 49-56.